

学習指導要領（国語科）の成立と展開

—— 高等学校を中心に ——

松岡 繁

目次

はじめに

- 一 新制高等学校の教科課程に関する件（昭和三二年）
新制高等学校教科課程の改正について（昭和三三年）
高等学校教科課程の一部改正について（昭和三四年）
- 二 学習指導要領 一般編（試案）（昭和二六年）
中学校
高等学校 学習指導要領 国語科編（試案）（昭和二六年）
- 三 昭和三〇年改訂 高等学校学習指導要領 一般編
昭和三〇年改訂 高等学校学習指導要領 国語科編
- 四 昭和三五年改訂 高等学校学習指導要領
- 五 昭和四五年改訂 高等学校学習指導要領
- 六 昭和五三年改訂 高等学校学習指導要領
- 七 平成元年改訂 高等学校学習指導要領
- 八 平成一一年改訂 高等学校学習指導要領
（参考資料）
おわりに
参考文献

はじめに

本稿は、昭和二二年の「新制高等学校の教科課程に関する件」から現行の学習指導要領までについて、その成立と展開を概観したものである。

大まかに分類すれば、八回に及ぶ学習指導要領の改訂には、それぞれの時代・社会の教育課題にこたえつつ発せられたという側面をみることができる。その点で、国語科教育は、常に歴史的・社会的な諸事情を踏まえた流れの中にあつたといえる。

例えば、現行の学習指導要領にみられる、選択必修制の導入、履修順序等の定め廃止、学校設定科目の導入等は、従前のものにはみられない、特色ある規定となっている。

これは、「創意工夫を生かした特色ある教育を展開し、特色ある学校づくりを進めることができるよう、教育課程の基準の大綱化、弾力化を図り、時間割や教育課程について各学校が一層創意工夫を生かして編成できるようにする。」という教育課程審議会の提言の趣旨を生かしたものであつた。

また反面、それぞれの改訂を通して、普遍的なものとして受け継がれてきたものも多い。例えば、言語の教育としての立場の重視、国語に対する関心を高め国語を尊重する態度、思考力を伸ばし心情を豊かにすること、言語感覚を磨くことといった、国語科本来の目標は、昭和二二年ころから、約六〇年間にわたって脈々と継承されてきたものである。

その点では、学習指導要領における国語科の歴史は、こうした「不易」と「流行」とが織りなす実践で成り立っているといつてもよい。

本稿が、新制高等学校の長い歴史の中から生み出された成果を、これからの教育活動の中でどのように生かしていくことができるのかという、必然的な課題の解明の一端ともなれば幸せである。

一 新制高等学校の教科課程に関する件 （昭和二年四月七日 発学 昭和二三年度から実施）

新制高等学校教科課程の改正について （昭和三年一〇月二一日 発学 昭和二四年度から実施）

高等学校教科課程の一部改正について （昭和二四年六月二五日 発初）

（一）新制高等学校の教科課程に関する件

教科構成（科目構成）

必修 国語(9)

選択 国語(6) 書道(6) 漢文(6) （一）内は単位数。以下同じ。

この通達は、「学習指導要領 一般編（試案）」（昭和二年三月二〇日 文部省発行）に記されている、次の文言を踏まえて発せられたものである。

なお、高等学校の教科及びその時間の割当は、その実施が昭和二十三年度からになっているので、ここでは、その説明を省くことにする。ただ、その要領については、別に文部省から発表されるものによって承知されたい。

なお、この「学習指導要領」における高等学校に関する説明は、この箇所のみであった。

ア 基本方針

新制高等学校の教育課程の特色は、選択教科制と単位制とにあった。これは、新制高等学校が、旧制の各種

の中等学校を統括したものであったので、生徒の多様な進路や個性に対応するためにとられた実践方法であった。

ところが、この通達では、普通教育を主とする学校（普通課程）と、専門教育を主とする学校（職業課程）とは、その内容が大きく異なっていた。普通課程では、当初の目標に沿ったもので、選択教科制と単位制を導入していたのに対し、職業課程では、単位制は採用されず、制限された選択教科制となっていた。

「高等普通教育を主とする高等学校の教科課程」における、国語関係の教科と時間数は、次のようになっている。

教科選択	小	科教修必	学 科		総 時 数	第一学年	第二学年	第三学年
			漢 書 国	体 社 国				
文 道 語	計	育 会 語						
二二〇	八〇五	三一五	七〇(二)	一〇五(三)	二一〇(六)	七〇(二)	七〇(二)	七〇(二)
二二〇		一七五	七〇(二)	一七五(五)	二一〇(六)	七〇(二)	七〇(二)	七〇(二)
二二〇		三一五	七〇(二)	一〇五(三)	二一〇(六)	七〇(二)	七〇(二)	七〇(二)

この当時、選択教科において、国語と漢文との位置付けとして、並列されたものであったことが分かる。

イ 教科書

昭和二十二年三月、文部省は、戦後の混乱を收拾するため、国語教科書として『高等国語』（六冊、教育図書）を急遽発刊した。その内容は、次のようなものであった。

課 卷	一 上	一 下	二 上	二 下	三 上	三 下
一	藤村詩抄	案内者	エッセイ	文章を学ぶ者のために	奥の細道抄	自然と人生
二	笛吹川をさかのぼる	ガラス障子	枕草子抄	新しいことば	寒山拾得	姉と弟
三	太郎冠者	うつりゆく心	談話	神曲	シェークスピアの女性観	詩についてぼくらの立場から
四	記録映画の幻想性	ロダンの遺言	望郷五月歌	あるがまゝに	天上の序曲	つきあひは格別
五	東海道五十三次	言語の本質	ベニスの商人	自由を護った人	ガラス戸の中	富士山頂
六		光栄の作曲家	万葉集抄	源氏物語	年来稽古	舞台装置と演出
七		うさぎ	赤がえる		国民的文学と世界的文学	八雲たつ
八		春が来た	自己と独創			柱時計
		付録 国語学習の手引	付録 国語学習の手引			付録 国語学習の手引

この教科書は、戦時態勢の色濃い教材を除き、評価の高かった教材を中心に編集されている。各学年とも、上・下二冊の全六冊であるが、作品数も少なく、古典などは数作品にとどまるなど、教科書としては貧弱なものであった。

(二) 新制高等学校教科課程の改正について

教科構成（科目構成）

必修 国語(9)

選択 国語(2)ゝ(6) 漢文(2)ゝ(6)

前回の通達における、職業課程の選択教科制等について批判が多かったため、それに対処するための通達で

学習指導要領（国語科）の成立と展開

ある。これについて、次のような文言がみられる。

昭和二四年度より実業関係を含めて新制高等学校の全部に対してこれを実施することになったから、この旨御了知ありたい。

この規定からも、実業関係（職業課程）に配慮した様子をうかがうことができる。

国語関係の教科及び時間数は、次のように定められた。

高等学校教科課程表

※必修

国 語	教 科		学 年 別 の 例		
	漢 文	国 語	第一学 年	第二学 年	第三学 年
	七〇(二)―二一〇(六)	※ 三一五(九)	一〇五(三)	一〇五(三)	一〇五(三)
	七〇(二)―二一〇(六)		七〇(二)	七〇(二)	七〇(二)
	七〇(二)―二一〇(六)		七〇(二)	七〇(二)	七〇(二)

この改正により、漢文は、国語科の中の一科目的（「科目」という語は、使用されていない。）なものとなっている。また、従来、国語科的グループに入っていた「書道」は、芸能科に属することとなった。

(三) 高等学校教科課程の一部改正について

科目構成

必修 国語(甲) (9)

選択 国語(乙) (2) 〃 (6) 漢文(2) 〃 (6)

ア 基本方針

その主旨の概要は、次のように記されている。

一、教科、科目の別を設けること。

二、国語に属する科目に、国語（甲）と国語（乙）とを設け、国語（甲）を必修科目、国語（乙）を選択科目としたこと。

これまでは、国語のうちで、九単位が必修教科とされ、それとは別に二単位ないし六単位が選択教科とされ、両者に名称の区別がなかったために混乱を生ずる場合があった。今回、これを区別して混乱を防止するために別の名称を両者につけたのである。

教科、科目等については、次のように定められた。

高等学校教科、科目、授業時間数、及び単位数表 国語（甲）必修

教科	科目	総時間数（単位数）
国語	国語（甲）	三二五（九）
	国語（乙）	七〇（二）―二二〇（六）
	漢文	七〇（二）―二二〇（六）

この一部改正において、はじめて教科・科目の考え方が取り入れられている。なお、教科課程は後の教育課程と同義に用いられている。

イ 教科書

国語教科書は、昭和二二年から国定制がとられていたが、昭和二四年以降は、検定制に移行することとなった。それが、現在まで継続されているのである。昭和二四年発行の教科書は、次の五種類であった。

『現代国語』六冊（富倉徳次郎他）

市ヶ谷出版

『われわれの国語』三冊（佐藤正憲他） 秀英出版

『国語高等学校』六冊（教育文化研究会） 教育図書

『新国語われらの読書』三冊（土井忠生他） 三省堂

『新国語ことばの生活』三冊（土井忠生他） 三省堂

これ以後、一五年三種類、一六年六種類、二七年九種類、二八年二種類、二九年二種類と次々に発行されていったのである。

二 学習指導要領 一般編（試案）（昭和二六年七月一〇日 文部省発行）

中学校 学習指導要領 国語科編（試案） 高等学校

（昭和二六年一〇月一日 文部省発行 昭和二六年度から実施）

（一）学習指導要領 一般編（試案）

基本方針

国語科における科目と時間配当及び単位数は、次のように示された。

高等学校の教科・科目・授業時間数および単位数表

国語（甲）必修

教科	科目	総時間数	学年別の例		
			第一年	第二年	第三年
国語	国語（甲） 国語（乙） 漢文	三二五（九） 七〇（二） 七〇（二） 一一〇（六）	一〇五（三） 七〇（二） 七〇（二）	一〇五（三） 七〇（二） 七〇（二）	一〇五（三） 七〇（二） 七〇（二）

さらに、国語の科目については、次のような説明がなされている。

国語（甲）は、毎学年三単位ずつ計九単位を、三年間にわたって必ずとらなければならない。国語（乙）や漢文をとる場合には、卒業までに二単位だけでも四単位とつても、六単位全部とつてもどちらでもよい。最初の二単位を第二学年、または第三学年でとつてもさしつかえない。

つまり、「国語（甲）」九単位、「国語（乙）」六単位、「漢文」六単位、合わせて二一単位を履修することが可能であった。

なお、「国語（乙）」は、現場では、ほとんど古文を教材としていた。

また、経験主義に立つ教育活動が、単元学習として推進されようとした時期であった。単元学習について、概論として次のように述べている。

単元学習とは、児童・生徒のさまざまな必要、関心、目的、問題などのうち、教育的に見て価値のある典型的なものをとらえ、それによって一連の活動を営ませ、生活経験が、目的に向かって高まるよう指導していくことである。（中略）児童・生徒の当面している問題を中心にして、その解決に必要な価値ある学習活動のまとまりであり、系列であるということが出来る。（傍線は引用者。）

もちろん、「二連の活動」とは、国語科の場合にあてはめれば、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことの諸活動を指しているものと考えられる。

（二）中学校 学習指導要領 国語科編（試案）

科目構成

必修 国語（甲）（9）

選択 国語（乙）（2）（6） 漢文（2）（6）

ア 指導内容

この要領は、高等学校の学習指導要領としては初めてのものであるが、その内容は次のようになっている。

まえがき 第一章 国語科の目標 第二章 中学校の国語科の計画 第三章 中学校の国語科の単元の例

第四章 高等学校の国語科の計画 第五章 高等学校の国語科の単元の例 第六章 国語科における文法の学習指導

第七章 国語科における漢文の学習指導 第八章 中学校の国語科における習字の学習指導 第九章

中学校の国語科におけるローマ字の指導 第十章 中学校・高等学校の国語科の評価 第十一章 中学校・高

等学校の国語科において使用に適した資料 付録 あとがき

その「まえがき」で、国語の授業の在り方について、新しい方向付けをしている。例えば、「国語科はどんな方向に進んでいるか」の項では、次のような説明がなされている。

（国語の教育課程は、だんだんと、広い社会の必要に応じるものになろうとしている。）

これまでの国語教育、ことに中等学校以上の国語教育は、教室の中で古典を読んだり、名文を読んだりすることをおもな仕事としていた。そうした言語文化の習得をとおして、言語生活を向上させようとねらっていた。これに対して、新しい教育課程の考え方では、われわれはどんな言語生活を営むかを考え、その生活の向上に必要な能力をつけようとする。われわれが社会生活をして行く上に読むのはまず新聞であり、聞くのはラジオである。（中略）話しことばの学習指導が小学校の一年生から高等学校の三年生までずっと、教育課程の中で一つの地位を得ようとしているのも新しい傾向である。また、古典よりも現代文学のほうが生徒にとって興味もあるし、能力にも合っているから、国語の教育課程の中では、後者のほうがもっと重要な

地位を占めようとしている。けれども古典の学習指導を捨ててはならない。多くのりっぱな、価値ある作品が過去において書かれてきており、それを読解する力がつけば、その読書は楽しいものであるばかりでなく、われわれの祖先の生活や精神が理解される。古典の学習が不要なのではなくて、国語教育を古典に限ることが狭いというのである。

（国語の教育課程は、読み方・作文・文法という科目に分れず、学習活動が総合的に展開されるように組織される方向にある。）

かつては、文法を文法として学習し、作文は作文として学習したのであるが、現代は、それらの活動を、一つの総合された学習の中に織り込んでいくとする。聞くこと、話すこと、読むこと、書くことが、生徒の必要と興味と能力とに応じて選ばれた主題のもとに展開される。このような主題の解決を中心として、生徒の聞く、話す、読む、書くの技能が高まっていく。文学を主とした単元であっても、なんらかの形で、聞く、話す、書く技能の訓練を含むようなくふうをする。これが今後の新しい国語学習指導の形態である。

このような方向付けのもと、必修科目「国語（甲）」は毎年三単位とし、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことの四領域が設定された。これらの言語活動を一層効果的なものにするため、中学校での文法的知識を更に整理し、文語文法のあらましを理解し、また国語要説、国語国字問題等について研究するようになっていったのである。

イ 単元学習の推進

また、それぞれの領域は、単独に指導するのではなく、「単元学習」の一環として授業に組み込まれたのである。この指導要領においても、「高等学校の国語科の単元の例」として、各学年の単元展開の例を次のように示している。

第一学年 古典はわれわれの生活とどんなつながりがあるか

第二学年 短編小説

第三学年 国語・国字をよりよくするにはどうしたらよいか

そのいずれについても、「話すこと」・「話しあい」に重点が置かれた学習活動となっている。

「単元の選び方および展開のしかたへの注意」として、次の諸点を挙げている。

単元を展開する際には、次のようなことを注意しなければならない。

- 1 単元は生徒の必要と興味と能力とに應じうるようによく考慮されなければならない。
- 2 目標と内容は明確に述べなければならない。そして、知識・理解・技術・能力・習慣・態度・鑑賞・理想などを含むべきである。

- 3 目標を達成するための学習活動は、いろいろと考えるなければならない。何か一つの学習方法に重きをおきすぎる単元は好ましいとは言えない。言語の分野における学習活動では、学級での会話、学級あるいはグループでの討議・パネル・ディスカッション・オープン・フォーラム・討論・劇化、知識を得るために読む技術、鑑賞や娯楽のために読む技術、独創的な作文などを含むべきである。

- 4 評価は目標に應ずるようになければならないし、その計画はいろいろ立てるべきである。

また、『中学校 高等学校 学習指導法 国語科編』（昭和二十九年七月一日 明治図書出版）が、文部省から発行された。当時としては、出色な指導法の解説書として好評であったといわれる。

この中で、「高等学校の学習指導の例」として、次の例が挙げられ、「単元学習」について解説がなされている。

例一 近代小説

例二 方言と共通語

例三 学校新聞の改善

例四 文学と人生

このように、「単元学習」について、具体的な指導方法やその方向付けを行い、指導の充実を求めているのである。

しかし、戦後強力に導入された、経験主義に基づく「単元学習」では、学習活動が盛んになるわりには、基礎学力が十分に育成されないという批判が強くなってきた。基礎学力としての漢字力や読解力の不足が指摘されることとなり、漢字、文法、読解力等について、継続的・系統的に指導を強めようという機運が高まってきた。

ウ 旧制中等教育との比較

ともあれ、この学習指導要領は、国語教育の新しい方向付けを行っており、極めて示唆に富むものとなっている。昭和一八年の「中学校教科教授及修練指導要目」に至るまでの旧制中等教育の国語教育と比べてみると、種々の違いがあるが、その若干を整理すると次のようになる。

- (ア) 国語科の領域構成は、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」の分野からなり、「ことばのきまり」的な事項(いわゆる文法・表記・文字など)は、この四つの分野に関連させて取り扱うことになったこと。
- (イ) 「講読」・「作文」・「文法」を国語科の分科として、教材・時間を特設していた旧制の実践とは全く変更されたものとなっていること。
- (ウ) 「作文」は、時間数が減少し、やや手薄となったこと。
- (エ) 品詞論や知識が中心であった「文法」は、解釈・表現のための文法学習となり、機能面が重視されたこと。
- (オ) 古典の学習は、注釈、通釈を中核としていたが、理解・鑑賞面が重視されはじめたこと。
- (カ) 経験主義に基づく「単元学習」が、学習形態として推進されようとしたこと。

このように、旧制中等教育の国語教育とは質を異にした、新しい時代の新しい教育理念・教育方法が実践に移されていったのである。

工 補 訂

「中学校
高等学校 学習指導要領 国語科編(昭和二六年改訂版)」の高等学校の部分の補訂(文初中 昭和二十七年八月八日)の通達は、必修国語である国語(甲)の中の漢文に充てる時間の明示がなかったので、それを明確にしたものである。「高等学校の国語学習指導の目標」のあとがきに、次の文章が加えられた。

高等学校の国語科は、必修の「国語(甲)」および選択の「国語(乙)」・「漢文」の三つの科目に分かれているが、「国語(甲)」は右に掲げた目標のすべてにわたって、すべての生徒が学習するものであり、「国語(乙)」・「漢文」は生徒の必要と興味とに応じて、これらの目標のうちのいくつかに重点をおいて学習するものである。

なお、「国語(甲)」には漢文の学習を含み、「国語(乙)」には漢文を主とする学習は含まないのである。この補訂により、科目の性格、漢文学習の位置付け等が明確にされることとなったのである。

三 昭和三〇年改訂 高等学校学習指導要領 一般編(昭和三〇年二月五日 文部省発行)

昭和三〇年改訂 高等学校学習指導要領 国語科編

(昭和三〇年二月二六日 文部省発行 昭和三十一年度から学年進行により実施)
(今回から(試案)の二字が削除された。)

(一) 昭和三〇年改訂 高等学校学習指導要領 一般編
基本方針

この指導要領は、「教育課程の改善、特に高等学校の教育課程について」（教育課程審議会）の答申に基づいて、発表されたものである。昭和二年一月一八日に答申された第一次答申では、「改訂の方針」が示されている。それを要約すると、次のようになる。

ア 高等学校の教育は、この段階における完成教育であるという立場を基本とすること。

イ 高等学校の教育課程は、各課程の特色を生かした教育を実現することを眼目として編成すること。

ウ 普通課程においては、教育課程の類型を設け、生徒の進路や特性等に応じ、上学年に進むにつれて分化した学習を行いうるようにすること。

エ 各教科・科目の単位数は、各課程、各コースの必要に応じうるようこれを一種類のみとせず、これに幅をもたせること。

こうした答申を踏まえて、「一般編」の「教科、科目および単位数」の項では、単位数の配当等について、次のように示されている。

(ア) 「国語（甲）」は、各学年になるべく均分して単位数を配当する。一〇単位として計画する場合は、下学年に単位数を多く配当することを原則とする。

(イ) 「国語（乙）」および「漢文」の一個学年における単位数は、それぞれ二または三とすることを原則とする。

(ウ) 「国語（乙）」および「漢文」を一個学年において同時に履修させる場合の単位数の計は、五以下とする。

(二) 昭和三〇年改訂 高等学校学習指導要領 国語科編

科目構成

必修 国語（甲）（9）～（10）

選択 国語（乙）（2）～（6） 漢文（2）～（6）

指導内容

この学習指導要領は、高等学校の教育課程の改訂に伴って、「中学校
高等学校 学習指導要領 国語科編」（昭和二六年改訂版）のうち、高等学校に関する部分を改訂したものである。

その「まえがき」において、次の三点を基本方針として掲げている。

1 生徒の個性や進路に応じた、各課程の特色を生かした教育課程を、適切に編成できるように、国語科の各科目の単位数やその学年配当を定めること。

2 各課程のすべての生徒に履修させる国語科の科目（「国語（甲）」と、生徒の個性や進路に応じて履修させる国語科の科目（「国語（乙）」、「漢文」）との区別を明らかにし、その組合せを適切にすること。

3 国語科の各科目の性格、目標、および内容をいっそう明らかにして、必要な学習が確実に実施されるようにすること。

改訂のうち、主なものを要約すると、次のようになる。

ア 教科目標には、三項目を挙げたが、豊かな読解力、ことばの的確な効果的使用の能力や態度、言語知識等が強調された。

イ 「国語（甲）」の領域は、① 読むことの学習（現代文、古文、漢文）、書くことの学習、② 聞くこと、話すことの学習から成り、③ ①②の学習に関連して、㉞音韻・文字・語い・表記法、㉟国語の特質、国語の変遷、国語と漢文との関係、国語国字問題、㊱口語文法、文語文法、㊲国文学の変遷などを学習させることにした。

ウ「国語（甲）」における分野を「現代文」「古文」「漢文」「話し方・作文」として、分野ごとの大体の量（時間数の割合）を示している。「国語（乙）」については、前回の学習指導要領では、その内容が必ずしも明確でなかったが、今回は指導すべき事項を「現代文」「古文」「国文法」「国語要説」「国文学史」「作文」「話し方」として、各事項の大体の授業時間数を示している。また、「国語（乙）」の指導計画は、これらの事項のいくつかを選んで立てても、一事項のみでもよいことにした。現場では、「古文」を選ぶのが大多数であった。

エ「国語（甲）」における分野ごとの大体の時間数は、次のとおりである。

（分野）

（割合）

（具体例）

現代文

$\frac{3}{10}$ ないし $\frac{4}{10}$

$\frac{3}{10}$ $\frac{4}{10}$ $\frac{3}{10}$

古文

$\frac{2}{10}$ ないし $\frac{3}{10}$

$\frac{3}{10}$ $\frac{2}{10}$ $\frac{2}{10}$

漢文

$\frac{2}{10}$

$\frac{2}{10}$ $\frac{2}{10}$ $\frac{2}{10}$

話し方・作文

$\frac{2}{10}$ ないし $\frac{3}{10}$

$\frac{2}{10}$ $\frac{2}{10}$ $\frac{3}{10}$

オ「国語（乙）」における事項ごとの大体の時間数は、次のとおりである。

現代文

70 ないし 210 単位時間

古文

70 $\frac{2}{10}$ $\frac{2}{10}$

国文法

35 $\frac{2}{10}$ $\frac{2}{10}$

国語要説

35 $\frac{2}{10}$ $\frac{2}{10}$

国文学史

35 $\frac{2}{10}$ $\frac{2}{10}$

作文

70 $\frac{2}{10}$ $\frac{2}{10}$

話し方 35 ヶ 70 ヶ

カ「古文」と「漢文」の教材について、具体的に、作品名を例示したのは、この改訂版の特色の一つである。

「国語（甲）」における具体的な作品名は、次のように記されている。

（古文）

記紀歌謡、万葉集の長歌・短歌、古今集・新古今集・山家集・金槐集などの短歌、芭蕉・蕪村・一茶などの俳句、竹取物語・源氏物語・大鏡・平家物語・世間胸算用・雨月物語などの物語類、土佐日記・枕草子・更級日記・徒然草・奥の細道・玉勝間などの日記・随筆・紀行類、謡曲・狂言・近松の浄瑠璃などの戯曲類、花伝書・三冊子・去来抄・源氏物語玉の小櫛などにある評論類、名家の語録類など。

（漢文）

短句・短文・故事・成語・格言・ことわざなどで訓読練習に適当なものや、論語・孟子・老子・莊子・韓非子などの論説類、十八史略・史記・蒙求・日本外史・先哲叢談などの史伝類、近思録・言志録などの語録類、文章規範・古文真宝・唐宋八家文・唐詩選・白氏文集・和漢朗詠集などの詩文類など。

なお、現代文については、具体的な作品は示されていないが、「生徒の理解力や、興味・関心や、現在および将来においての必要などを考慮して、適切にしかつ価値あるものを、広く選ぶ。」と説明している。

四 昭和三五年改訂 高等学校学習指導要領

（昭和三五年一〇月一五日告示 昭和三八年度から学年進行により実施）

（今回から「文部省告示」となる。）

科目構成

必修 現代国語(7) 古典甲(2)又は古典乙Ⅰ(5)
 選択 古典乙Ⅱ(3)

(一) 基本方針

「高等学校教育課程の改善について」(昭和三五年三月三十一日 教育課程審議会答申)の「基本方針」では、次のように説明されている。

一 高等学校のそれぞれの課程の特色を生かした教育を実現できるようにするとともに、生徒の能力、適性、進路等に応じて適切な教育を行なうことができるようにすること。この際、大学との関連、普通課程と職業に関する課程との関係にも留意すること。

二 普通課程においては、その教育課程について二、三の基本的な類型を構想し、各学校においては、それぞれこの基本類型に必要な変化をもたせて運営できるようにすること。

また、科目の内容について、必要かつ可能なものには二種類を示して、いずれかを履修させるようにすること。

三 普通課程においては、教養の片寄りを少なくするため、必修科目を多くするとともに、その内容を精選充実し、基本的事項の学習がじゅうぶん身につくようにすること。(四、五省略)

六 基礎学力の向上と科学技術教育の充実について、次のように措置すること。(1省略)

(2) 国語に関しては基礎学力を高めるため、現代国語の読解力および作文の能力の向上を図るような方法を講ずること。(傍線は引用者。)

また、「教科等に関する事項」の中で、「国語」に対して、次のような答申がなされた。

ア 国語の基礎学力を高めるため、現代国語の読解力および作文の能力の向上を図り、かつ古典の指導が系

統的に行なわれることを目ざして、国語を、「現代国語」「古典甲」、「古典乙Ⅰ」および「古典乙Ⅱ」の四科目とすること。

イ 「現代国語」は、すべての生徒に毎学年共通に履修させるものとし、その内容は、現代文および話し方・作文を中心とし、文学的な内容だけに片寄ることなく、論理的な表現や理解をも重んじること。

ウ 「古典甲」と「古典乙Ⅰ」は、そのいずれか一科目をすべての生徒に履修させるものとし、「古典乙Ⅱ」は「古典乙Ⅰ」を履修した後に履修させるものとする。

エ 古典に関する三科目の内容は、古文および漢文を主とし、下記のようにすること。

(ア) 「古典甲」の内容は、古典に対する概観的な理解を得させることを主眼とし、平易に学習することができるように考慮すること。

(イ) 「古典乙Ⅰ」および「古典乙Ⅱ」の内容については、現行の「国語(乙)」および「漢文」で取り扱っている内容を精選し、系統的な指導を行なうようにすること。

オ 古典の各科目で取り扱う漢文については、内容を豊富に学習させるため、書き下し文などによる指導を考慮すること。(傍線は引用者。)

この答申においては、「技術革新の時代の基礎学力の向上のために、現代国語の読解力及び作文の能力の向上を図ること」、「現代国語」は、すべての生徒に毎学年共通に履修させるものとする」、「その内容は、現代文および話し方・作文を中心とし、文学的内容だけに片寄ることなく、論理的な表現や理解をも重んじるようにすること」等が特に強調されている。

これらは、新しい科目である「現代国語」設定の趣旨を明確に打ち出した説明となっている。

(二) 指導内容

学習指導要領では、国語の「教科目標」を、次のように定めている。

1 生活に必要な国語の能力を高め、言語文化に対する理解を深め、思考力・批判力を伸ばし、心情を豊かにして、言語生活の向上を図る。

2 経験を広め、知識を求め、教養を高めるために、また、思想や感情を人に伝えるために、目的や場に応じて正しく的確に理解し表現する態度や技能を養う。

3 ことばのはたらきを理解させ、国語に関する知識を高め、国語に対する関心や自覚を深めて、国語を尊重し、その発展に寄与する態度や習慣を身につけさせる。

これらの目標は、小・中学校の目標との関連が図られた内容となっている。

国語科の改訂のうち、主なものを要約すると、次のようになる。

ア 必修科目として、普通科においては、「現代国語」七単位、「古典乙Ⅰ」五単位、ただし、特別の事情がある場合は、「古典甲」二単位としている。また、職業教育を主とする学科においては、「現代国語」七単位、「古典甲」二単位または「古典乙Ⅰ」五単位としている。つまり、「現代国語」及び「古典甲」または「古典乙Ⅰ」を必修としたのである。これら以外の科目としては、「古典乙Ⅱ」三単位を設けている。

イ 各科目ごとに、「1 目標」「2 内容」「3 指導計画作成および指導上の留意事項」が掲げられた。「現代国語」は、「聞くこと、話すこと」「読むこと」「書くこと」及び「ことばに関する事項」の三領域一事項から成り、各領域ごとに、指導事項とジャンル別の学習活動とが、「ことばに関する事項」では、指導事項と考慮事項とが設けられている。その中で、各領域の学習は、「相互に関連させて、有機的に指導し、片寄りのないようにすること」が必要であると述べ、関連学習を強調しており、単元学習を主とする傾向は薄らいできたといえる。

ウ 「現代国語」において、作文を主とする学習は、各学年とも年間授業時数の $\frac{2}{10}$ 以上を充てることとした。また、聞くこと、話すことを主とする学習には $\frac{1}{10}$ 程度を充てることが望ましいとしている。

エ 「現代国語」七単位を充てる場合には、全日制の課程にあつては、第一学年においては三単位、第二学年においては二単位、第三学年においては二単位を配当することとした。

オ 古典としての古文や漢文について、「古典甲」は、概論的な理解を得させること、「古典乙Ⅰ」は、系統的に学習させるよう配慮すること、「古典乙Ⅱ」は、発展的に学習させるように配慮することとしている。

なお、古文と漢文との比率は、「古典乙Ⅰ」ではおよそ三対二の程度とし、「古典乙Ⅱ」では、およそ二対一の程度とした。

これは、教科の組織を改めて、従前とかく各科目の内容に重複がありがちであったのを改めたものである。カ 「現代国語」の登場は、高校国語科においては初めて設定となったわけである。それは、大正末期以来続いてきた「現代文」重視の思想が一つの結実を示したともいえるのである。

キ ともあれ、国語学力の低下が、文字力・作文力・読解力等について問題となってきた。その一端には、経験主義の単元学習の指導にあるといわれ、今回の改訂につながったのである。

ク 『高等学校学習指導要領解説 国語編』（昭和三十六年四月一日 好学社 文部省）が発行された。

五 昭和四五年改訂 高等学校学習指導要領

（昭和四五年一〇月一日告示 昭和四八年度から学年進行により実施）

科目構成

必修 現代国語(7) 古典Ⅰ甲(2)

選択 古典Ⅰ乙(5) 古典Ⅱ(3)

(一) 基本方針

「高等学校教育課程の改善について」の答申（昭和四四年九月三〇日）が、教育課程審議会から出された。「改善の基本方針」の中で示された主な事項は、次のようなものであった。

○ 人間として調和のとれた発達を目ざし、現状にかんがみ特に下記の点を重視する必要があること。

- (1) 観察力と創造的思考力の育成
- (2) 理性的態度と道徳的実践力の涵養
- (3) 豊かな情操の陶冶
- (4) 健康と体力の増進

○ 国家および社会の有為な形成者として必要な資質の育成を目ざし、現状にかんがみ特に下記の点を重視する必要があること。

- (1) 人間として相互に尊重しあう態度の育成
- (2) 責任を重んじ規律を守る態度ならびに自由自律の精神の涵養
- (3) 社会事象に対する正しい認識や公正な判断力の育成
- (4) 国家に対する理解と愛情を深め、広い国際的な視野に立つて、民主的な国家および社会の発展に努める態度の育成

これは、進学率が上昇し、高等学校が後期中等教育段階の青少年の大部分を教育する機関となっていること、及び生徒の能力・適性・進路などが著しく多様なものとなっていることを踏まえての答申であった。

また、高等学校国語に対する「改善の具体方針」は、次のようなものであった。

ア 生活に必要な国語の理解と表現の能力を高めること、および言語文化に対する理解を深めることが、目標においていっそう明確になるようにすること。

イ 国語の学習指導が効果的に行なわれるようにするため、現行どおり科目を「現代国語」及び古典に関する科目とするが、古典に関する科目は「古典Ⅰ甲」「古典Ⅰ乙」及び「古典Ⅱ」の三科目とすること。

ウ 「現代国語」は、現行どおりすべての生徒に履修させるものとし、国語の表現や理解に関する基礎的な能力を高めるための指導がいっそう適切に行なわれるようその性格、内容、構成等について検討すること。

なお、その際、作文や話し方の能力を向上させること、および論理的文章の読解力を伸ばすことを特に重視すること。

エ 「古典Ⅰ甲」は、すべての生徒に履修させるものとする。

ただし、「古典Ⅰ乙」を履修する場合は、「古典Ⅰ甲」の履修を要しないものとする。

また、「古典Ⅱ」は、「古典Ⅰ甲」または「古典Ⅰ乙」を履修したのちに履修させるものとする。

オ 古典に関する科目においては、古典に親しませるようにいっそう配慮し、その教材は古文および漢文を主とし、その内容は下記のようにすること。

（ア）「古典Ⅰ甲」は、精選された作品について、その原文にふれることなどを通して興味深く学習させ、古典に対する関心を高めるようにすること。

（イ）「古典Ⅰ乙」は、「古典Ⅰ甲」の内容を含むものとし、「古典Ⅰ甲」よりも取り扱う作品の範囲を広げ、古典の読解を養うとともに、古典に対する関心を高めるようにすること。

（ウ）「古典Ⅱ」は、古文・漢文のそれぞれについて、一つまたはいくつかの作品を精選し、それを深く読み味わうことができるようにすること。（傍線は引用者。）

特に、傍線部分は、今回の改訂の特色の一つとなったところである。

(二) 指導内容

学習指導要領の国語科に関する改訂のうち、主なものを要約すると、次のようになる。

ア 標準単位数は、「現代国語」七、「古典Ⅰ甲」二、「古典Ⅰ乙」五、「古典Ⅱ」三としている。

また、必修科目は、「現代国語」及び「古典Ⅰ甲」とした。

イ 教科目標は、「生活に必要な国語の能力を高め、国語を尊重する態度を養う。」という総括的目標の下に、次の五項目を挙げている。

- 1 国語によつて的確に理解し表現する能力と態度を養う。
- 2 国語による理解と表現を通して、思考力・批判力を伸ばし、心情を豊かにする。
- 3 国語による伝達を効果的にして社会生活を高める能力を伸ばし態度を養う。
- 4 言語文化を享受し創造するための基礎的な能力を伸ばし態度を養う。
- 5 国語に対する認識を深め、言語感覚を豊かにし、国語を愛護してその向上を図る態度を養う。

教科目標の5にある「言語感覚」という文言は、三五年の「学習指導要領」では、古典三科目の指導事項の中にあったものである。今回は、各科目の目標の中にも、「言語感覚を豊かにし」という語句が用いられ、強調された文言となっている。

ウ 各科目は、それぞれ「1 目標」「2 内容」「3 内容の取り扱い」の三項目に分かれている。「現代国語」の「内容」は、「A 聞くこと、話すこと」「B 読むこと」「C 書くこと」の三領域からなり、「ことばに関する事項」については、各領域の中で指導することにして、項目としては特別に設けられていない。3の(8)で、「ことばに関する事項については、次の事項に配慮して指導するものとする。ア文章、文、語句などについては、中学校の指導の上に立つて、内容のA、B、Cの指導の中で深めるようにすること。イ言

語の役割、国語の変遷、国語の特質などについては、主として内容のBの指導の中で触れるようにすること。」と記されているだけである。

エ 「現代国語」で、「書くこと」の学習の年間授業時数の割合を一〇分二以上、「聞くこと、話すこと」の割合を一〇分一程度としているのは、前回と同様である。

オ 古典三科目の中で、「古典Ⅱ」において、「精選された作品を深く読み味わって」という語句を「目標」の中に入れ、教材として、「古文、漢文のそれぞれについて、一つまたはいくつかの作品を精選して取り上げるようにすること。」としている。これは、今回の改訂の特色の一つである。

カ 『高等学校学習指導要領解説 国語編』（昭和四十七年五月二五日 東京書籍 文部省）が発行された。

六 昭和五三年改訂 高等学校学習指導要領

（昭和五三年八月三〇日告示 昭和五七年度から学年進行により実施）

科目構成

必修 国語Ⅰ(4)

選択 国語Ⅱ(4)〈準必修〉 国語表現(2) 現代文(3) 古典(4)

(一) 基本方針

「小学校、中学校及び高等学校の教育課程の基準の改善について」の答申（昭和五一年二月一八日）が、教育課程審議会から出された。

「教育課程の基準の改善のねらい」として、次の三点が示された。

- (1) 人間性豊かな児童生徒を育てること

- (2) ゆとりのあるしかも充実した学校生活が送れるようにすること
- (3) 国民として必要とされる基礎的・基本的な内容を重視するとともに児童生徒の個性や能力に応じた教育が行われるようにすること

また、「高等学校における各教科・科目の編成等」については、次のように示された。

高等学校における各教科・科目の編成については、進学率の著しい上昇により能力・適性・進路等の一層多様化した生徒に対する教育の在り方を考慮した場合、基本的には次のような方向で改善を図ることが適当である。

ア 高等学校の主として低学年において履修する必修の各教科・科目は、中学校教育との関連を一層密接にするとともに高等学校教育として共通的に必要なとされる基礎的・基本的な内容を中心とし、中学年以降の選択科目の基礎となるように編成する。(後略)(傍線は引用者。)

ここには、時代に即した、教科・科目の方向付けが明確に打ち出されている。

こうした改善のねらいを踏まえて、国語についての「改善の基本方針」を、次のように述べている。

小学校、中学校及び高等学校を通じて、児童生徒の発達段階にに応じて、内容を基本的な事項に精選するとともに、言語の教育としての立場を一層明確にし、表現力を高めるようにする。

その際、小学校及び中学校においては、国語力を養うための基礎となる言語に関する事項が系統的に指導できるようにし、高等学校においては、それが発展的に指導されるようにする。(後略)(傍線は引用者。)

ここには、「言語の教育」としての国語科の姿が明確に浮かび上がっている。

前回の改訂のころより、高等学校への進学率は九〇%に近くなり(昭和五三年ごろは九五%ほど)、高等学校の義務教育化の時代を迎えた。「落ちこぼれ」という現象を生むような時代でもあった。こうした時にあつ

て、「聞く、話す、読む、書く」という言語活動の経験を通して言語生活を向上発展していこうという考え方に對して、「語句、文法、表記」などを正確に教えることが大切であると考えられるようになったのである。これは今までの、「言語活動主義」から「言語能力主義」への転換といってもよいものである。

こうした考え方のもと、今までの「現代国語」と古典に関する三科目の基本的な内容を整理して「国語Ⅰ」を新設し、これを低学年において全員に履修させることになったわけである。このことは今まで二〇年間にわたり続いてきた現代国語、古典体制を改めたわけである。小説、評論などの現代文、古文、漢文などを一科目として取り扱う総合国語が設定されたのである。

(二) 指導内容

学習指導要領の国語科に関する改訂のうち、主なものを要約すると、次のようになる。

ア「総則」において、（指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項）の中で、「学校生活全体における言語環境を整え、生徒の言語活動が適正に行われるように努めること。」とあり、言語環境の整備に学校全体が取り組むよう求めている。

この考え方は、以後の改訂においても継承されていくこととなるのである。

イまた（配慮すべき事項）の中で、「各教科・科目の指導に当たっては、生徒の学習内容の習熟の程度などに応じて弾力的な学級の編成を工夫するなど適切な配慮をすること。」とあり、能力別学級編制を認めている。

ウ教科目標は、単純明快なものとなり、「言語感覚を豊かにし」の文言は、従前以上に重視され、中核目標の中に取り入れられている。

エ標準単位数は、「国語Ⅰ」四、「国語Ⅱ」四、「国語表現」二、「現代文」三、「古典」四となり、「国語Ⅰ」

を必修科目とした。この結果、国語科の必修単位は減少した。

オ 各科目は、「1 目標」「2 内容」「3 内容の取扱い」に分かれている。各科目とも、ジャンル別の学習活動についての規定は一切なく、厳選された指導事項のみが取り上げられている。

カ 「国語Ⅰ」は、「表現」「理解」の二領域と「言語事項」から成っている。「言語事項」を、「A 表現」「B 理解」の二領域とともに大きく取り上げているのは、今回の改訂の特色の一つである。「言語の教育」の立場を具体化・明確化したものといえる。

キ 「国語Ⅱ」は、選択科目ではあるが、「国語Ⅰ」に引き続いて、すべての生徒に履修させることが望ましいとした。

ク 「国語Ⅰ」において、古典と近代以降の文章との授業時数の割合は、おおむね同等とすることを目安としている。また、古典における古文と漢文との割合は、一方だけに偏ることのないようにしている。

ケ 「国語Ⅰ」において、作文の学習には一単位程度を充てるものとした。

コ 『高等学校学習指導要領解説 国語編』（昭和五四年五月三一日 ぎょうせい 文部省）が発行された。

サ また、『高等学校国語指導資料「表現」の学習指導・国語Ⅰ・国語Ⅱを中心として』（昭和五七年二月二七日 東山書房 文部省）が発刊された。

この書は、「国語Ⅰ」及び「国語Ⅱ」における「表現」の領域について、指導に関する具体的な参考資料として作成されたもので、作文・話し方の学習指導、指導計画、評価の方法などについて具体的に述べたものである。第一章 表現学習指導の意義 第二章 表現学習指導の内容と方法 第三章 表現学習における評価

第四章 指導計画の作成 で構成されている。

七 平成元年改訂 高等学校学習指導要領

(平成元年三月一五日告示 平成六年度から学年進行により実施)

科目構成

必修 国語Ⅰ(4)

選択 国語Ⅱ(4) 国語表現(2) 現代文(4) 現代語(2) 古典Ⅰ(3) 古典Ⅱ(3) 古典講読(2)

(一) 基本方針

「幼稚園、小学校、中学校及び高等学校の教育課程の基準の改善について」の答申(昭和六二年一二月二四日)が、教育課程審議会から出された。

それによると、「教育課程の基準の改善のねらい」として次の四点が示された。

- ① 心豊かな人間の育成
- ② 自己教育の育成
- ③ 基礎・基本の重視と個性を生かす教育の充実
- ④ 文化と伝統の尊重と国際理解の推進

こうしたねらいを踏まえて、国語全体の改善については、次のように示された。

小学校、中学校及び高等学校を通じて、言語の教育としての立場を一層重視しながら、国語に対する関心を高め、国語を尊重する態度を育てるようにする観点から、音声言語と文字言語にかかわる表現及び理解の内容について、児童生徒の発達段階に応じた基礎的・基本的な事項を取り上げて構成する。その際、特に、情報化などの社会の変化に対応するため、目的や意図に応じて適切に表現する能力と相手の立場や考えを的

確に理解する能力を養い、思考力や想像力及び言語感覚を育てるようにする。

小学校及び中学校においては、国語の力の基礎となる言語に関する事項について学校段階等に応じその内容の重点化を図る。また、高等学校においては、生徒の能力・適性等に応じた指導を充実するため、科目を増やし履修の幅を拡大する。(後略)(傍線は引用者。)

また、高等学校国語の改善についても、次のように示された。

(ア) 生徒の能力・適性等に応じた指導を充実し、国語への関心を高め表現力を伸ばし、日本の文化と伝統についての理解を深めさせる観点から、科目を増やし履修の幅を拡大する。このため、新しい科目として「現代語」及び「古典講読」を設けるとともに現行の「古典」を「古典Ⅰ」及び「古典Ⅱ」に分けることとする。教材の選定に当たっては、人間としての在り方生き方について考えを深めさせることにも資するよう配慮する。

(イ) 「国語Ⅰ」の「表現」の領域については、話すこと、書くことの学習指導を通して、特に、考えをまとめて論理的に表現できる能力の育成を一層重視し、表現活動の充実を図るよう内容を改善する。また「理解」の領域については、聞くことに関する能力を高め、読解や鑑賞の能力及び読書力を伸ばすとともに、言語文化に対する関心を深めることができるよう内容を改善する。「言語事項」については、表現と理解に役立つ言語に関する内容を重点的に取り上げるようにする。(後略)(傍線は引用者。)

この答申でみられるように、科目を増やし履修の幅を拡大すること、言語の教育としての立場を一層重視すること、音声言語に関する指導を重視すること等が強調されているのである。

(二) 指導内容

学習指導要領の国語科に関する改訂のうち、主なものを要約すると、次のようになる。

ア 表現指導の充実を図り、特に自分の考えをまとめて論理的に表現できるようにするとともに、話すこと、聞くことの指導も十分に行うようにしたことである。

イ 従前の学習指導要領においても、表現力の育成が取り上げられていて、作文力の育成が課題となっていた。今回の改訂においても、表現力の育成は、重要な課題となっている。ただ、今回の改訂では、従前に文言言語だけでなく、音声言語に関する表現力の育成が取り上げられていることは注目すべきことである。

ウ 日常の言語活動の向上を図り、社会生活に必要な言語能力を伸ばすという観点から話すこと、聞くことの指導をどのように計画的に実施していくかが大きな課題となったのである。

エ 音声言語指導は、実際の教室では計画的に取り上げられることが少なかっただけに、その指導方法や評価方法について、より一層の研究が必要となってきたのである。

オ 必修科目の「国語Ⅰ」は、その内容は、「A 表現」「B 理解」「言語事項」の二領域一事項で構成されている点は、前回と同様である。しかし、その指導事項は詳細なものとなっており、音声言語の指導が強く打ち出されている。

例えば、「A 表現」の指導事項は、次のように定められている。

ア 目的や場に応じて話題や題材を選び、自分の考えをまとめること。

イ 主題や論旨が明確になるように構成を工夫して話したり書いたりすること。

ウ 対象を明確に表す語句を選び、文脈に即して用いること。

エ 事実と意見、説明と描写の区別などに注意し、筋道を立てて話したり書いたりすること。

オ 目的に応じて適切な形式や文体を工夫し、話や文章をよりよく整えること。

カ 優れた表現に接してその条件を考え、自分の表現に役立てること。

キ 目的や場に応じて、効果的に話したり朗読したりすること。(傍線は引用者。)

カ 古典の分野においても、「古典Ⅰ」に、次のような文言がある。

○音読、朗読、暗唱などを通して古典の文章に親しみ、作品の読解、鑑賞を深めること。(傍線は引用者。)

古典の指導においても、音声言語指導の充実を図る観点から、「暗唱」が今回の改訂において、新たに加えられたのである。

キ 「国語Ⅰ」において、作文の指導には一単位程度を配当するものとされている。しかし、前回同様、「話すこと、聞くこと」についての時間配当はない。配慮事項として、「話し方や話し合いの学習を充実させるようにすること。」と記されているだけである。

ク 『高等学校学習指導要領解説 国語編』(平成元年二月二五日 教育出版 文部省)が発行された。

ケ また、『高等学校国語指導資料 指導計画の作成と学習指導の工夫―言語に関する事項の学習指導』(平成四年五月二〇日 学校図書 文部省)が発刊された。

この書は、高等国語についてその趣旨・内容の一層の理解を得るため、指導計画の作成についての基本的な考え方や学習指導の在り方、指導法の工夫などについて、事例を挙げて解説したものである。具体的には、第一章 国語科の指導計画と学習指導 第一節 国語科の指導計画 第二節 国語科の学習指導 第二章 言語に関する事項の学習指導 第一節 言語に関する事項の学習指導の基本的な考え方 第二節 言語に関する事項の学習指導の工夫 第三節 言語に関する事項の指導計画と評価の工夫 で構成されている。

八 平成一一年改訂 高等学校学習指導要領

(平成一一年三月二九日告示 平成一五年度から学年進行により実施)

科目構成

必修 国語表現Ⅰ(2)及び国語総合(4)のうちから一科目(選択必修制)

選択 国語表現Ⅱ(2) 現代文(4) 古典(4) 古典講読(2)

(一) 基本方針

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、盲学校、聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について」の答申(平成一〇年七月二十九日)が、教育課程審議会から出された。

「教育課程の基準の改善のねらい」で示された主な事項は、次のようなものであった。

- ① 豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること。
- ② 自ら学び、自ら考える力を育成すること。
- ③ ゆとりのある教育活動を展開する中で、基礎・基本の確実な定着を図り、個性を生かす教育を充実すること。
- ④ 各学校が創意工夫を生かし特色ある教育、特色ある学校づくりを進めること。

こうした提言をうけて、今回の改訂は、完全学校週五日制の下、各学校が「ゆとり」の中で特色ある教育を展開し、生徒に豊かな人間性や自ら学び自ら考える力などの「生きる力」の育成を図ることを基本的なねらいとして行ったものである。

答申の中で、国語科の「改善の方針」については、次のように示された。

(ウ) 小学校、中学校及び高等学校を通じて、言語の教育としての立場を重視し、国語に対する関心を高め国語を尊重する態度を育てるとともに、豊かな言語感覚を養い、互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力を育成することに重点を置いて内容の改善を図る。特に、文学的な文章の詳細な読解に偏りがちであつ

た指導の在り方を改め、自分の考えをもち、論理的に意見を述べる能力、目的や場面などに応じて適切に表現する能力、目的に応じて的確に読み取る能力や読書に親しむ態度を育てることを重視する。

そのため、現行の「表現」及び「理解」の各領域と「言語事項」の構成を改め、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」及び「読むこと」の領域と「言語事項」から内容を構成するとともに、実践的な指導の充実を図る観点からも、説明や話し合いをすること、記録や報告をまとめることなどの言語活動例を示すようにする。その際、各領域の指導が調和的に行われるよう、各学校段階の特質等に応じてそれらの指導時数の目安を示すことを考慮する。（後略）（傍線は引用者。）

この「改善の方針」では、次の三つの言語能力の育成を重視したのである。

- ① 自分の考えをもち、論理的に意見を述べる能力。
- ② 自分の考えをもち、目的や場面などに応じて適切に表現する能力。
- ③ 目的に応じて的確に読み取る能力や読書に親しむ態度。

さらに、今回の改訂の特色の一つである「言語活動」についても、その取組等を提言しているのである。

また、高等学校国語の「改善の具体的事項」については、次のように示された。ここでは、必修科目のうち、「国語総合」の部分を引用することにする。

(ウ) 「国語総合」は、現行の「国語Ⅰ」の内容を改善したものとする。総合的な言語能力を伸ばすため、文章や作品等の読解学習が中心となっている現状を改め、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」及び「読むこと」の各領域の学習が調和的に行われるよう内容を改善する。その際、「話すこと・聞くこと」の領域においては、論理的に意見を述べたり、相手の立場や考えを尊重して話し合ったりする態度や能力の育成を重視する。「書くこと」の領域においては、目的や場面などに応じて適切に表現する能力の育成を重視する。ま

た「読むこと」の領域においては、目的に応じた確に読み取る能力や読書に親しむ態度の育成を重視するとともに、古典の世界に親しみがもてるよう指導の在り方について工夫する。(後略)(傍線は引用者。)

新しい科目である「国語総合」の在り方について、具体的に明示している。

(二) 指導内容

学習指導要領の国語科に関する改訂のうち、主なものを要約すると、次のようになる。

ア 国語の「目標」は、次のように示されている。

国語を適切に表現し、的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。(傍線は引用者。)

言語表現力、言語理解力と、それを基盤とした「伝え合う力」の育成が、国語科の目標であるとしたのである。

旧指導要領と比べてみると、「理解」↓「表現」の順序であったのが、今回は、「表現」↓「理解」となっている。これは、情報化・国際化社会に必要な「表現する能力」を重要視したからであろう。

また、「伝え合う力」が、今回新たに加えられたことである。『高等学校学習指導要領解説 国語編』(平成一年 東洋館出版 文部省)九ページでは、次のように解説している。

「伝え合う力」とは、人と人との関係の中で、互いの立場や考えを尊重しながら、言語を通して適切に表現したり的確に理解したりして、円滑に相互伝達、相互理解を進めていく能力のことである。

必修科目として、二科目のうち、どちらかを選択する選択必修制(学校が必修科目を選択)が導入されたのは、古典科目間の選択を除けば、今回が初めてのことである。ここには、教育課程運用の弾力化の姿勢

をうかがうことができるのである。

ウ 各科目とも、「1 目標」「2 内容」「3 内容の取扱い」で構成されている。必修科目の「国語総合」では、「2 内容」は「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の領域に分かれ、それに「言語事項」が加わっている。この領域構成は、昭和五三年改訂で「A 表現」、「B 理解」「言語事項」の二領域一事項に設定されて以来、今回の改訂で二〇年ぶりに復活したことになる。

エ 「内容の取扱い」において、三領域のそれぞれについて、「言語活動」の例を示している。

国語の全科目にわたって、「言語活動」の実態をまとめると、次のようになっていいる。

高等学校国語における「言語活動」例

領域	A 話すこと・聞くこと	B 書くこと	C 読むこと
国語表現Ⅰ・Ⅱ	<p>ア 自分の考えを明確にして、スピーチ、発表、討論などを行うこと。</p> <p>イ 観察したことや調査したことを記録したり、まとめて報告したりすること。</p> <p>ウ 相手や目的に応じて、案内、紹介、連絡などのための話をしたり文章を書いたりすること。</p> <p>エ 身近にある様々な表現を集めその効果などについて考えたり、生徒の表現活動について自己評価や相互評価を行うこと。</p>	<p>(ア) 題材を選んで考えをまとめ、書く順序を工夫して説明や意見などを書くこと。</p> <p>(イ) 相手や目的に応じて適切な語句を用い、手紙や通知などを書くこと。</p> <p>(ウ) 本を読んでその紹介を書いたり、課題について収集した情報を整理して記録や報告などを書いたりすること。</p>	<p>(ア) 文章に表れたものの見方や考え方をなどを読み取り、それらについて話し合うこと。</p> <p>(イ) 考えを広げるため、様々な古典や現代の文章を読み比べること。</p> <p>(ウ) 課題に応じて必要な情報を読み取り、まとめて発表すること。</p>
国語総合	<p>(ア) 話題を選んで、スピーチや説明などを行うこと。</p> <p>(イ) 情報を収集し活用して、報告や発表などを行うこと。</p> <p>(ウ) 課題について調べたり考えたりしたことを基にして、話し合いや討論などを行うこと。</p>		

現代文	古典	古典講読
<p>ア 論理的な文章を読んで、書き手の考えやその展開の仕方などについて意見を書くこと。</p> <p>イ 文学的な文章を読んで、人物の生き方やその表現の仕方などについて話し合うこと。</p> <p>ウ 文章の理解を深め、興味・関心を広げるために、関連する文章を読んだり創意的な活動を行ったりすること。</p> <p>エ 自分で設定した課題を探索し、その成果を発表したり報告書などにまとめたりすること。</p>	<p>ア 古文や漢文の調子などを味わいながら、音読、朗読、暗唱をすること。</p> <p>イ 国語の変遷などについて関心を深めるため、辞書などを用いて古典の言葉と現代の言葉とを比較対照すること。</p> <p>ウ 古典に表れた思想や感情の特徴、表現上の特色などについて話し合うこと。</p> <p>エ 古典を読んで関心をもったことなどについて調べ、文章にまとめること。</p>	<p>ア 古文や漢文の調子などを味わいながら、音読、朗読をすること。</p> <p>イ 古典に表れた思想や感情などについて、感じたことや考えたことを文章にまとめたり発表したりすること。</p> <p>ウ 古典を読んで、関連する文章や作品を調べたり読み比べたりすること。</p>

オ 前出の『解説』書七四ページでは、言語活動の教材について、次のように解説している。

言語の教育としての立場を重視する国語科においては、生徒の言語活動を通して、話すこと・聞くことの能力、書くことの能力及び読むことの能力の育成に役立つ適切な教材を用意する必要がある。その際、自ら学び自ら考える力を育てるためにも、教材を、単に文章や作品といった意味にとどめることなく、生徒が進んで学習活動ができるような具体的な学習の手立てや方向も併せて示したものととして考えていくことが大切である。

今回は、領域ごとに言語活動例を示しているが、それらの言語活動が十分行われるよう、生徒の興味・関心、言語能力の実態に応じて適切な教材を作成し、選定することが求められている。

カ 「国語総合」において、話すこと・聞くことを主とする指導には一五単位時間を配当するものとし、書くことを主とする指導には三〇単位時間程度を配当することになった。特に、話すこと・聞くことを主とする

指導に、授業時数を配当することは、昭和五三年、平成元年の改訂にはみられなかったことである。
「話すこと・聞くこと」及び「書くこと」の領域における指導時数の変遷は、次のようになっていく。

「話すこと・聞くこと」の指導時数の変遷（昭和二六年版（試案）には記述なし）

告示等	科目（必修）	標準単位数	内 容
昭30	国語（甲）	9 ～ 10	○話し方・作文の時間数の割合 2/10ないし3/10（話し方固有の時間数は示していない。）
昭35	現代国語	7	○聞くこと、話すことを主とする学習には、各学年とも年間授業時数の1/10程度を充てることが望ましい。
昭45	現代国語	7	○聞くこと、話すことについては、各学年1/10程度とすること。（標準単位数としての授業時数に対する割合）
昭53	国語Ⅰ	4	（数字は示していない。）
平成元	国語Ⅰ	4	（数字は示していない。） ○話し方や話し合いの学習を充実させるようにすること。
平11	国語総合	4	○話すこと・聞くことを主とする指導には15単位時間程度を配当するものとし、計画的に指導を行うこと。
平11	国語表現Ⅰ	2	（数字は示していない。） ○話すこと・聞くこと及び書くことの指導は、相互の関連を図りながら効果的に行うようにし、授業時数は一方に偏らないようにする。

「書くこと」の指導時数の変遷（昭和二六年版（試案）には記述なし）

告示等		内 容	
昭30	国語（甲）	9 ～ 10	○話し方・作文の時間数の割合 $\frac{2}{10}$ ないし $\frac{3}{10}$ （作文固有の時間数は示していない。）
昭35	現代国語	7	○作文を主とする学習には、各学年とも年間授業時数の $\frac{2}{10}$ 以上を充てる。
昭45	現代国語	7	○書くことについては、各学年 $\frac{2}{10}$ 以上とすること。（標準単位数としての授業時数に対する割合）
昭53	国語Ⅰ	4	○作文の学習には1単位程度を充てるものとし、生徒の文章力をできるだけ伸ばすようにすること。
平元	国語Ⅰ	4	○作文の指導には1単位程度を配当するものとし、生徒の表現力をできるだけ伸ばすようにすること。
平11	国語総合	4	○書くことを主とする指導には30単位程度を配当するものとし、計画的に指導を行うこと。
	国語表現Ⅰ	2	（数字は示していない。） ○話すこと・聞くこと及び書くことの指導は、相互の関連を図りながら効果的に行うようにし、授業時数は一方に偏らないようにする。

この表からも分かるように、「話すこと・聞くこと」の指導に充てる指導時数については、昭和三〇、三二、四五年、平成一一年版（「国語総合」）では、数字をあげて示している。その示し方は異なるもの、お

おもね授業時数の十分の一程度の時数を配当することとしているのが分かる。
 「書くこと」の指導に充てる指導時数については、毎回、なんらかの形で数字をあげて示している。おおむね授業時数の五分の一から四分の一程度の時数を配当していることが分かる。

キ 前回の改訂において、音声言語教育の充実が強調されたが、ともすればなおざりにされがちで、現実には読解指導に埋没する傾向が強かった。今回の時間配当を契機に、実際の授業の中で、時間数がきちんと確保されているか見守る必要がある。

また、今後の実践に当たっては、生徒の実態をよく把握し、指導のねらい、指導内容、指導方法、評価の在り方等について、綿密な指導計画を作成し、計画的・意図的に取り組むことが大切になってくる。

ク 「高等学校生徒指導要録の改善等について」（平成一三年四月二七日）が、文部科学省から通知された。

「各教科の評価の観点及びその趣旨」について、国語科では、次の五項目が示された。

評価の観点	趣 旨
関心・意欲・態度	国語や言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図り、進んで表現したり理解したりするとともに、伝え合おうとする。
話す・聞く能力	自分の考えをまとめたり深めたりして、目的や場面に応じ、筋道を立てて話したり的確に聞き取ったりする。
書く能力	自分の考えをまとめたり深めたりして、相手や目的に応じ、筋道を立てて適切に文章に書く。
読む能力	自分の考えを深めたり発展させたりしながら、目的に応じて様々な文章を的確に読み取ったり読書に親しんだりする。
知識・理解	表現と理解に役立てるための音声、文法、表記、語句、語彙、漢字等を理解し、知識を身に付けている。

なお、旧生徒指導要録では、評価の観点は、次の四項目であった。

評価の観点		趣	旨
関心・意欲・態度		国語や言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図り、進んで表現したり理解したりしようとする。	
表現の能力		自分の考えをまとめたり深めたりして、相手や目的に応じて筋道を立て、表現を工夫して話したり文章に書いたりする。	
理解の能力		話し手や書き手の考えに即して内容を正確にとらえ、自分の考えを深めたり発展させたりしながら話や文章を的確に理解する。	
知識・理解		表現と理解に役立てるための音声、文法、表記、語句、語彙、漢字等を理解し、知識を身に付けている。	

前回に比べると、「話す・聞く能力」、「書く能力」「読む能力」と細分化されるなど、より具体的な観点が設けられ、評価の方向付けが明確になっている。

ケ『高等学校学習指導要領解説 国語編』（平成一一年二月二八日 東洋館出版 文部省）が発行された。

（参考資料）

高等学校学習指導要領国語科の変遷

名	称	通達・告示日	実施年	必修	選択	単位数	卒業単位数
新制高等学校の教科課程に関する件		昭22・4 通達	昭23	国語(9)	国語(6) 漢文(6)	必修9 選択12	85

高等学校学習指導要領	高等学校学習指導要領	高等学校学習指導要領	高等学校学習指導要領	高等学校学習指導要領	高等学校学習指導要領 国語科編	高等学校学習指導要領 国語科編 (試案)
平11・3 告示	平元・3 告示	昭53・8 告示	昭45・10 告示	昭35・10 告示	昭30・12 発表	昭26・10 発表
平15	平6	昭57	昭48	昭38	昭31	昭26
国語総合 (4) 又は 国語表現Ⅰ (2)	国語Ⅰ (4)	国語Ⅰ (4)	現代国語 (7) 古典Ⅰ甲 (2)	現代国語 (7) 古典甲 (2)又は 古典乙Ⅰ (5)	国語(甲)(9 ゝ10)	国語(甲) (9)
国語表現Ⅱ (2) 現代文(4) 古典(4) 古典講読 (2)	国語Ⅱ(4) 国語表現(2) 現代文(4) 現代語(2) 古典Ⅰ(3) 古典Ⅱ(3) 古典講読 (2)	国語Ⅱ(4) 国語表現(2) 現代文(3) 古典(4)	古典Ⅰ乙 (5) 古典Ⅱ(3)	古典乙Ⅱ (3)	国語(乙)(2 ゝ6) 漢文(2ゝ6)	国語(乙)(2 ゝ6) 漢文(2ゝ6)
必修2又は4 選択16又は14	必修4 選択20	必修4 選択13	必修9 選択8	必修9又は12 選択3	必修10 選択12	必修9 選択12
74	80	80	85	85	85	85

おわりに

本稿は、新制高等学校の設立から現行の学習指導要領までの実践の足跡を考究したものである。

そこには、それぞれの時代相の中で、的確に課題をとらえ、その解明を図ろうとした実践の積み重ねをみることが出来る。それは、私どもの実践活動に大きな示唆と指針とを与えてくれるものである。

例えば、昭和二六年版の学習指導要領は、高等学校としては初めてのものであるが、そこに示された内容は、極めて斬新なものであった。新しい国語教育はどうあるべきか、どのような教育活動が考えられるのかといった課題に対して、真摯に意欲的にその考え方が示されている。今日の実践活動にも活用できるような示唆に富む内容が多い。私どもは、こうした貴重な営みの歴史を注視する必要があると思う。

今日、国語科教育の抱えている問題点は多いが、本稿が問題点の浮き彫りとその解明の礎の一端ともなれば幸せである。

参考文献

- ・『国語教育史資料』（第二・五巻）東京法令 平九
- ・文部省『高等学校学習指導要領解説 国語編』好学社 昭三六
- ・文部省『高等学校学習指導要領解説 国語編』東京書籍 昭四七
- ・文部省『高等学校学習指導要領解説 国語編』ぎょうせい 昭五四
- ・文部省『高等学校学習指導要領解説 国語編』教育出版 平元
- ・文部省『高等学校学習指導要領解説 国語編』東洋館出版 平一一

- ・文部省『中学校 高等学校 学習指導法 国語科編』明治図書 昭二九
- ・文部省『高等学校国語指導資料「表現」の学習指導』国語Ⅰ・国語Ⅱを中心として』東山書房 昭五七
- ・文部省『高等学校国語指導資料 指導計画の作成と学習指導の工夫』言語に関する事項の学習指導』学校図書 平四
- ・『高校教育基本資料集』（月刊高校教育増刊）学事出版 一九九二・七
- ・『教育課程の変遷からみた戦後高校教育史』（月刊高校教育増刊）学事出版 一九九五・一一
- ・『高校教育基本資料集 答申・報告編（上）』（月刊高校教育増刊）学事出版 一九九四・五
- ・『高校教育基本資料集 答申・報告編（下）』（月刊高校教育増刊）学事出版 一九九四・六
- ・大矢武師『高校国語教育の理論と方法』明治図書 一九七七
- ・田中孝一編『新しい高校国語 指導の理論と実践』（第一巻～第三巻）明治書院 平一三
- ・大田勝司外編『新版』中学校 高等学校 国語科学習指導の研究』双文社出版 二〇〇二